

お茶うけ 第18話

雷の落ちない村

前回に続いて三橋節子のお話です。

三橋節子は、1975年2月24日に亡くなりました。35歳でした。その2週間まえの2月10日に、息子の草麻生(くさまお)の満5歳の誕生日を病室で祝っています。1973年末に癌が肺に転移していると認められた時から、彼女は、幼いわが子(草麻生となずな)が成長の過程で巡り合うさまざまな場面に、母として共に立ち会い優しい言葉をかけることが出来ないことを悟っていました。でも、母の心を伝えたい残したい、その一心で遺言ともいえる一連の童画を、亡くなる前年の秋に描きました。



三橋節子は、その童画のストーリーを「近江むかし話」の2つの民話を元に創作しました。その民話は「雷の落ちない村」と「雷封じの宮」で、どちらも雷の集中攻撃を受けていた村が、村人や修験者の活躍によって「雷の落ちない村」になったというものでした。三橋節子は、「雷封じの宮」に出てくる雷獣に興味を持ち、さらに湖の主の大ナマズの助言と草麻生の活躍を加えて、次のように創作しました。

「湖の伝説 - 雷の落ちない村 -」は、表紙を含めて11枚の画で構成されています。

- 画その1: 琵琶湖畔で3人の少女が仲良く楽しそうに遊んでいます。平和でのどかな村です。
- 画その2: 雲の上に荒れ狂う雷が現れ、稲光が光っています。夕立のたびに雷がなり、この村にばかり落雷するのです。雷は人や牛、馬にも落ちました。雷に狙われた村でした。
- 画その3: 雷に打たれて倒れ伏す子供と鳥を背景に、草麻生(くさまお)が考え込んでいます。やがて草麻生は「よし、おれが雷をやっつけたら」と決心します。ほんとは、おしっこがちびる程こわかったけど。
- 画その4: 草麻生は、手作りの弓や杉の実鉄砲で、雷を退治しようと頑張っています。しかし、この挑戦は失敗に終わります。
- 画その5: 草麻生は、今度は狐のお面やすずきの葉っぱのお面をかぶって、八つ手の実とばして、かかっています。しかし、雷は知らぬ顔で相手にせず、挑戦はまたも失敗です。
- 画その6: 湖畔でがっかりしている草麻生に、湖の主の大ナマズが顔を出して、「この村には、雷を手引きする雷獣がいる。本来、天界にいる雷獣が住みついているので、この村にばかり雷が落ちるのだ。大きな麻で編んだ網で捕まえることだ」と教えます。考え込んでいた草麻生は、問題解決のヒントを得ます。
- 画その7: 草麻生は、大勢の村人と一緒に大きな麻の網を編んでいます。村人総出で網をつくり、村はずれの森に仕掛けました。
- 画その8: いよいよ網を張って、雷獣を待ち受けます。夜も更けて村人は帰り、草麻生が1人で見張っていると、雷獣が森の上を飛んでよぎりました。月の光に照らされた姿が、うすきみ悪いけれど、とても美しかったので見とれて網を引くの忘れ、逃がしてしまいます。
- 画その9: 次の日の夕方に、入道雲が見る見るひろがって、雷が鳴り出し、雨も降りだしました。そこに雷獣が現れたので、草麻生は「エイッ！」と網を引いて、雷獣を捕らえました。捕まった雷獣には、雷を呼ぶ力がなくなり、雷は遠のいていきました。草麻生は村の人達と一緒に喜んでます。
- 画その10: 雷獣は「命だけはお助けを」と泣いてたのみです。「もう二度と雷を手引きしません」と約束します。草麻生は可哀相になって、天に放してやります。

これは、三橋節子が天職とする絵筆によって、子供たちに人生に必要なさまざまな教訓を書き残したものです。このような人に育っておくれという母親の願いを、ユーモアを含めて書き上げた三橋節子の温かい心に、私は胸を打たれました。

この話は、梅原猛著「湖の伝説 - 画家・三橋節子の愛と死 -」新潮社刊に、感銘深く書かれています。

以上